

大後文樂瘦 人秋掃稻編或屋

全資幻戲樂行



第六回

新橋嶺舞場

親切感謝明る帝都

愛國百人一首

初春の初日かゞよふ神國の神のみかげをあふげもろもろ

荒木田久老

八東穂の瑞穂の上に千五百秋國の秀見せて照れる月かも

橘 千蔭

香具山の尾上に立ちて見渡せば大和國原早苗とるなり

上田秋成

かけまくもあやに畏きすめらぎの神のみ民とあるが樂しさ

栗田土滿

遠つ祖の身によろひたる緋緘の面影浮ぶ木々のもみぢ葉

蒲生君平

大日本神代ゆかけて傳へつる雄々しき道ぞたゆみあらずな

賀茂季鷹

青海原潮の八百重の八十國につぎてひろめよ此の正道を

平田篤胤

一方に靡きそろひて花すゝき風吹く時ぞみだれざりける

香川景樹

安見しゝわが大君のしきませる御國ゆたかに春は來にけり

大倉鷺夫

かきくらすあめりか人に天つ日のかがやく邦のてぶり見せばや

藤田東湖

大阪 文樂座人形淨瑠璃芝居

吉例全員引越興行

第六回外題

(廿六日より三十日まで)

盲杖 櫻雪社

和田合戦女舞鶴

市若初陣の段

近頃河原達引

四條河原の段
堀川猿廻しの段

増補 忠臣藏

本藏下屋敷の段

關取 千兩幟

猪名川内の段



◇ 座各竹松の月七 ◇

明 治 座	東 京 劇 場	歌 舞 伎 座
<p>一 お目見得だんまり 一 幕</p> <p>二 赤穂義士審判 三 幕</p> <p>三 道行初音旅 常磐津連中 竹本連中</p> <p>四 東海道中膝栗毛 三 幕</p>	<p>一 幻燈部屋 三 幕</p> <p>二 上羽月の雨 長唄連中</p> <p>三 下五民われら 三 幕</p>	<p>一 妹背山婦女庭訓 御殿の場</p> <p>二 素 袍 落 竹本連中</p> <p>三 一本刀土俵入 二 幕</p> <p>四 玉 屋 清元連中</p>
<p>七月興行大歌舞伎</p>	<p>藝術座水谷八重子一座</p> <p>日曜晝間興行十一時</p>	<p>恒例尾上菊五郎一座</p> <p>喜多村綠郎 加入 大谷友右衛門</p> <p>毎夕四時・日曜晝間興行十一時</p>
<p>七・六〇</p> <p>四・〇〇</p> <p>二・四〇</p> <p>一・二〇</p>	<p>六・六五</p> <p>三・六八</p> <p>二・〇八</p> <p>一・二〇</p>	<p>御 觀 劇 料 (稅 共)</p> <p>九・四〇</p> <p>六・七〇</p> <p>四・〇〇</p> <p>二・四〇</p> <p>一・一〇</p>

決戦下服装に就き

皆様へ御願ひ

今こそ決戦、一億總蹶起の時、撃ちて止まむの氣慨に燃へて戦争生活の實踐に徹底せねばなりません。演劇、演藝、映畫亦決戦下必要不可欠な戦争生活の一部面であることは今更申すまでもなく、隨て御觀覽は戦争生活の一部であり延長であります。

既に戦争生活の延長である以上、御觀覽の御態度、御服装等飽くまで國家の要求に融け込まなければならぬと存じます。

従來、御觀覽の場合、動もすれば服装華美に流れ過ぎると云はれました。平時なら兎も角、此の決戦下に左様のことのあるべき筈はありませんが、然し大勢様御集りの劇場ですから服装は格別目立つな服装を以て場内を御埋め下さい。そして御心豊かに朗らかに、決戦下必要不可欠の健全娛樂を御覽下さいませう御願ひいたします。

新調は
見合せ
今後の衣
生活は
かうしま
しよろ

のでありまして、その場合の服装が時代の流行を作るとさへ云はれました、事實そうだったのであります。

だから今日御集り下さる皆様が服装の簡素美、剛健美、明朗美に徹底致され率先範を垂るるの思召しで、總て決戦下にふさはしい服装を御召し下さらば、それが一代の風俗を作り逞ましい日本人の心意氣となつて決戦下一億の士氣はいやが上にも昂揚さるるに至りませう。

どうぞ皆様。これからは、殿方も、御婦人方も、假りにも绚烂華美などと云ふ舊觀念を美事一蹴し、簡素、剛健、明朗

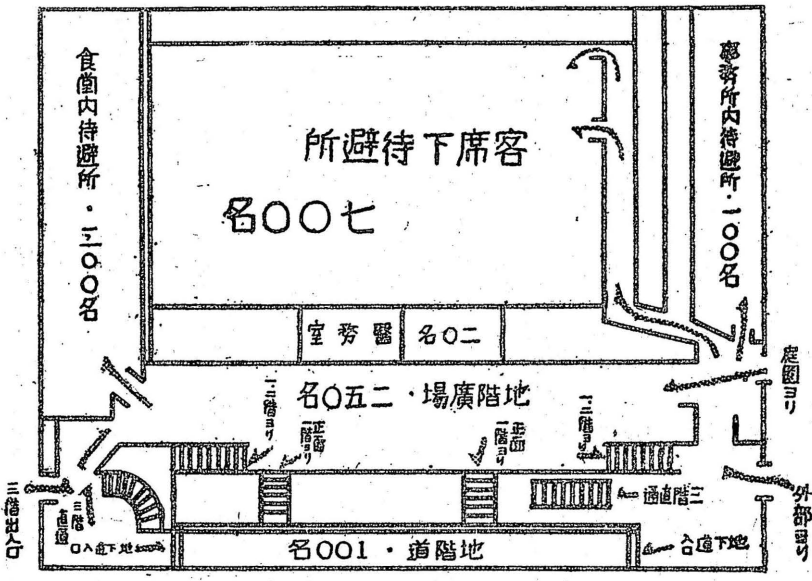
松竹株式会社

東京興行者協會

戰時下興行場ニ於ケル防空上

ノ措置要綱

- 空襲警報發令に依り各興行場の興行中止の際に於ける入場券の取扱に關する件
- 一、興行開始ノ前賣入場券等ノ入場料ハ原則トシテ拂戻（現金）ヲ爲スコト 但シ相手方ノ承諾ヲ受ケ次回興行ヲ開始シタル日又ハ特ニ指定シタル日ノ興行ニ其ノ入場券等ヲ有効トシテ入場セシムルコト 前項ノ拂戻ハ警報解除後爲スコト
 - 二、興行開始後ノ入場料ハ拂戻（現金）ヲ爲ササルコト
 - 三、興行開始中興行ヲ中止シタル時ハ其ノ中止時期ガ一回興行ニ要スル時間ノ概ネ三分ノ二ヲ經過セサル場合ハ其ノ入場券等ヲ以テ再入場又ハ割引入場ヲ爲サシムルコト 但シ假設興行、巡回興行又ハ空襲ニ依リ興行場被害ヲ受ケ其ノ他興行再開不能ナル時ハ其ノ入場券ハ無効トス
 - 四、再入場ハ次回同種興行ヲナス時ハ殘存番組ノ興行ニ限り有効トス
 - 五、割引入場料ハ其ノ入場券等ノ料金ノ半額以下トシ次回興行ノ全番組ヲ觀賞セシムルコト
- 其の他當局より興行時間入場人員及入場料に關シ特に指示ありたる時は其の指示に依ること



乍 憚 口 上

御ひるき皆々様彌々御清祥の段大慶至極に奉存候 扱て當る七月興
行の儀は當場吉例により大阪名物文樂座人形淨瑠璃を迎へ本邦特有
の由緒深き世界に誇る古典藝術の御鑑賞を願ふことと相成り候
今度も太夫、三味線、人形遣全員上京致し名曲數々選擇の上豪華
麗なる配列をなし十分に古眞の妙味を發揮致す事に苦心罷在候へば
必ずや御期待に添ひ得るものと確信仕候 何卒倍舊の御引立を以て
陸續御來場の上御批判御評判の程伏て奉懇願候

昭和十八年七月吉日

文 樂 座 敬 白

昭和十八年七月一日初日
毎夕四時開演

外題 五日目替り

◎各等學生團體に限り半額

御 觀 劇 料

- 一 等：(御一名)：七圓三十五錢(稅九割共)
- 二 等：(御一名)：四 圓(同六割共)
- 三 等：(御一名)：二圓四十錢(同)
- 三 階：(御一名)：一圓十錢(同四割共)

切符取附
銀座地下鐵街芝居切符賣場
電話銀座一八一七六九七〇
ブレイカイド各店取扱
銀座本店電話京橋 五〇一三まで

切符賣場用 電話銀座 七五七
事務所用 電話銀座 一九〇
お密

木挽町

新橋演舞場

文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立つようなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來——舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと云つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、

この三四十年來、殆ど本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと云はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達し

て來たかといふに、さうではなかつた。人形を遣ふといふこと、これはさうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子(くぐつまはし)といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年前のことにある。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と云へるでせう。これに對して三味線は永祿中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが

提擧し、慶長の初年あたりは、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、云はば立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音楽上の大成を試み作者近松門左衛門を得て、戯曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことになる。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば、義太夫節に限るやうになつたのであつた。これは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と、人形の動作とがピツタリ合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これ

も歴史的に云ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノボーから肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と、人知とが費された。一個の人形を三人がかりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道満大内鑑」(葛の葉の狂言)からといふことになつてゐる。今日から大凡二百年前にあたる。但し文樂座でもツメ人形(略してツメ)と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載さ

れてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむづかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた。慶長以前の傀儡子時代の、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも、歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大坂

文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、その以前のは三四間から五間ぐらゐるものであつたらしい。手遣ひ式でない絲繰り式のもつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。

二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて、二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたからの名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のことで、義太夫近松頃は、特別の

場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り、蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。それが次第に「出語り、出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。

けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣蔵」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの、人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より抜萃)



三人座頭の段

盲杖 櫻雪社

三人座頭の段

福の市 徳の市 玉の市

ツ

レ

- 竹本七五三太夫
- 豊竹つばめ太夫
- 竹本雛太夫
- 豊竹宮太夫
- 竹本越名太夫
- 竹本隅若太夫
- 豊竹松島太夫
- 鶴澤綱造
- 野澤喜左衛門
- 鶴澤重造
- 豊澤團伊三
- 鶴澤燕三
- 豊澤仙三郎
- 竹澤團作
- 鶴澤清廣

『盲杖櫻雪社』は官位を頂きに京へ上る三人の座頭が、面白飾につれて振り可笑しく踊り戯れる目出度き曲である。

床本

何事も辛未の明の春、盲杖櫻えにしとて人丸様の御社に、雪白妙の朝霧も晴れるや注連の飾り蝦、位取りとて都をさして急ぐ道さへ冬の空危い所をヲヲサ合點ちや野梅山、梅香を聞く計り名所古蹟も知らぬが佛、探り探りて急ぎ来る。何と徳の市福の市コウ三人連れ立つて官を貰ふて遊んでから仲よう仕様ちや有るまいか、ヲヲコリヤ玉の市の云ふ通り長の道中連れ立つも他生

の縁で有うかい、併し福の市は足弱で世話がやけるで困つた事、アアコレ徳の市其様に足べたをそしるものぢやないわい、其代り俺に一つの隠し藝在所踊をうさ晴しに一寸踊つて、アアウハ、聞かしてやらうかい、コリヤ面白我等も共に一ト踊、サア早ふに福の市は扉をしやんと座に構へ、沖の白帆の雲隠れ春は曙の朝景色、ちよつと此眼を明石濁、我れに見せよや丸の社は和歌の守神、おいらも一寸はなる口の杓とふの見すがらにくみかはしたる大瓶の、酒が云はする口拍子、按摩疝癢針とふの朝は、迅ふから遠近の流渡りの大井川、蓮臺ならぬ肩

人形

福の市 吉田光造

徳の市 桐竹龜松

玉の市 吉田玉市

車、我が手で諷う小室節、一に権現ナ
 ア……へ二に玉律島、三に下り松ナア
 ……へ、四に鹽釜よ、天の橋立切戸の
 文珠文珠様はよけれ共、切戸の文字が
 氣に懸る懸る來るか／＼と濱へ出て見
 ればノウサイ濱の松風頃やまさるサヤ
 とかけのホイ、眞赤となすいた水仙す
 かれた柳のホイノの心せきちく氣は紅
 葉、サアトカケマツカトナ池の池のエ
 エ鱒めが朝日に輝く夕日になびく眞菰
 のこ影にちよつと出でちよつとはね二
 度さ出てはねた、ヤレはねたがどうす
 りや鱒と娘はねたが賞玩ハレワイヤコ
 レワイサノ田舎踊の面白さ、早入月に
 花に風ねぐらを急ぐ三人連れ杖を力に
 たどり行く。

さわり集

堀川の段

老手引手もしほらしき、女ははだに
 白無垢や、上にむらさき藤の紋、中着
 緋紗綾に黒襦子のおび、年は十七はつ
 花の雨にしほるる立すがた、男も肌は
 白小袖にて、黒き綸子に色淺黄、二十
 一期の色さかりをば、戀と云ふ字に身
 を捨小舟、何處へ取り付くしまとても
 なし、鳥邊の山はそなたぞと、死に行
 く身のうしろ髪、彈く三味線は祇園町
 茶屋のやま衆が色酒に、亂れて遊ぶさ
 わぎ合ひ、アノ面白さを見るときは、
 イエ／＼夫れではトント聲にしほれが
 ないわいな、アノ面白さ見る時は、こ
 ふ諷いなされ、アイ、アノ面白さを見
 る時は、オットよしく、染殿そなた
 とそれがしが、去年の初秋七夕の、座
 敷おどりをかこ付けて、忍び逢ふた事
 おもひ出す……。

和田合戦女舞鶴

市若初陣の段

市若初陣の段

前

竹本南部太夫

鶴澤重造

竹本伊達太夫

野澤喜左衛門

後 竹本織太夫

竹澤園六

荏柄の平太は實朝の息女齋姫を討つて行方をくらししたので、實朝は怒つて平太の二子きんざとを斬つて其の恨みを報ひんとした。これを知つた平太の妻綱手は、きんざとを伴つて實朝の母尼將軍の許に身を寄せて、その難をまぬがれ様としたが、それは一子きんざとこそは、實は前將軍頼家の遺兒であるからであつた。

それとは露知らぬ實朝は、どうしてもきんざとの首を得ようと、思つたが、追に母の在る館に軍兵を向けるも子として出来難く、爲に佐々木綱若、千葉瀧若等、未だ年端も行かぬ重臣の子供のみを集めて討手にさし向けた。その頃尼御前の館には、淺利の與市

が妻板額女も籠つてゐたが、少年軍の寄手に向ひ、此の中に我が子市若丸も在るや否やと尋ねた。處が一同の答には、市若は戦さするのが怖いらしく、遂に姿を見せなかつたとその卑怯を罵るので、板額女は心も心ならず惱み悶へた。そして一同に、夜戦さは武士の恥故、明日の朝改めて寄せられよと、一ト先皆を歸したが、其後へ唯一人、「きんざとの首申し受けん」と、颯爽として現はれたのは、一子市若丸であつた。

市若丸は今、母板額女とは別に、父淺利與市の許に居るのだ。それは板額女が荏柄の平太の従兄弟故、武士の義理から與市が離別したからである。

人形

板 額 女 桐竹紋十郎
 市 若 丸 吉田玉男
 尼 君 桐竹紋太郎
 公 曉 君 桐竹小紋
 荏 柄 綱 手 桐竹紋司
 淺 利 與 市 吉田玉助

母子は久方振りの對面に、嬉しさ懐
 しさで胸はいっぱいであつたが、板額
 女はさとくも、夫與市が市若をさし向
 けたのは、若君たるきんさとお身替
 りに立たん心である事を見てとつた。

そして忠と義の爲には、愛しい我が子
 をも殺さねばならぬ、武士のつらさに
 今更の如く泣したが、それを押し隠
 し、市若にうち向ひ、今に手柄を立て
 させてやらう程に——と、一ト間へ忍
 ばせる事にした。

斯くて板額は、折柄の夜闇を幸ひ、
 市若のひそむ一ト間の外で、態と聲を
 荒らげ、

「……誰ぢや、それへ見えしは何者ぢ
 や、何ぢや荏柄の平太とや、しやア正
 しく汝姫君の敵、遁さぬやらぬ……」
 と、罵り立て、尙も、

「……何と云ふ平太、此板額に密に云
 ふ事がある。ヲテ聞こふ、サアどふぢ

や、ヤヤヤア何と云ふ、アノ市若を取
 り返しに來た。ソリヤならぬ、尤も汝
 が子なれ共、わらの上からわしが貰ひ、
 與市殿と二人して、育て上げたるこち
 の者、今に成つて戻せとは、これ／＼
 こなたは現在主殺し、其主殺しの子と
 云ふとの、コレ市若は腹を切らねばな
 らぬわいの、最前もきんささと、打變
 つたらどうするぞと問ふたれば、潔
 ふ腹切つて遣は武士と云はるると云ふ
 たぞや、二人の親に譽められうと思ひ
 死ぬのは定、可哀想に取かへさずと置
 いて下され……」

と、叫び續けた。これは板額女が獨
 りして、如何にも平太が忍び寄つた如
 くよそほひ、我が子市若に腹切らせ、
 きんさとの身替りに立てんとする、苦
 肉の策に他ならなかつた。

一方一ト間に忍ぶ市若は、母が血涙
 を絞つての策とは知らず、一圖に、扱

は自分は主殺しの大罪人、荏柄の平太の子であつたかと悲しくも思ひ込んで了つた。そして潔きよく腹かき切つて果てたが、それも幼な心に武士としての名を惜しんだからである。

板額が、血の泪のこもる一策に見事市若は自害したが、此の様に尼君始め一同も身をうくばかり涙にくれた。尼君は沁々と板額母子の忠心義心に感じ入り、市若への追善にと、若君のきんさとの鬢を切り捨てて、綱手と共に館を落すことにしたが、成人の後きんさとの、よみをそのままこへにかえ、公曉法師と名乗つたのは、此の稚子のことである。

此の淨瑠璃は、享保二十一年三月並木宗輔が操に書いたもので、その梗

概は、藤澤入道父子は和田北條の間に戦端をひらかせ、將軍實朝を殺して天下の執權職たらんと陰謀を企らんでゐた和田北條兩家から、荏柄の平太が實朝の息女齋姫の縁談の使者として参向したが、聞き入れられず、自分の戀の叶はぬ意趣晴しに姫を討つて了つた。

此の騷動から淺利の與市が駆けつけたが、妻の板額女が平太と従兄弟の關係から、門は閉ざされるので、與市は妻を離別し、板額は門を打ち破る。

一方、實朝からは姫を討つた平太の一子きんさと(實は前將軍頼家の子)の首を渡せとの上意。茲に板額は我が子市若を平太の子と欺き、市若がそれを恥ぢて自害するのをきんさとの身代りにする——と云ふので、二段目が門破り、その切が此の市若初陣の段であ

る。

さわり集

猪名川内の段

オオ道理でござんす、もつともでござんすわいな、角力取を男に持てば、江戸長崎やくにくへ、往しやんすりや其跡の、留守は濫更女氣の、ひとりくよく物あんじ、夫に怪我のない様にと、祈る神さま佛さま、妙見さまへ精進も、戻らしやんして顔見るまで、案じて夜を寝ぬ女房の、今此切なる苦しみを、連れ添ふわたしに云はしやんせぬ、お前はそれ程つれないと、女夫になつた今までを、かぞへ立て、恨みなみだに時うつり……。

四條河原の段
堀川猿廻しの段

お俊
傳兵衛 近頃河原達引

四條河原の段
堀川猿廻しの段

ッ

切

竹本相生太夫
野澤吉五郎
豊竹古靱太夫
鶴澤清六
鶴澤友衛門

人形

横淵官左衛門 吉田玉市
仲買勘藏 吉田多三郎
井筒屋傳兵衛 吉田光造
廻しの久八 吉田玉徳
駕かき 大ぜい
與次郎の母 吉田小兵吉
弟子おつる 桐竹紋司
兄與次郎 吉田榮三
娘おしゆん 吉田文五郎
井筒屋傳兵衛 吉田光造

解説

此作者は確然としないが、多分近松半二であらうと云はれてゐる。又或は天明二年頃市村座で演じた「猿廻し」の狂言を、同五年に爲川宗輔、筒井半二、奈河七五之助が加筆して淨曲にしたのではないかとの説もある。何れにしても天明二年正月竹本八重太夫が江戸に下つて堀川の段を語り、猿廻しの所未曾有の評判であつたと云ふ記録がある。御承知の通り此曲は上中下の三巻からなつてゐるが、それも一ツの事件を仕組んだものではなく、三つの事件から構成されてゐる。即ち公卿侍と所司代下僕との喧嘩。猿廻し佐吉の孝行。お俊傳兵衛情死の件——である。

目の不自由な母親がおつると云ふ稽古娘に鳥邊山の唄をさらはせて歸した後に、小猿を肩に與次郎は日暮時を急いで歸つて來ました。喜んで迎へた母親の、老の身の兎角に愚痴に流れるのを、與次郎は母に案じさせまいと、口から出まかせに氣休めを並べます。嘘とは知りながらも母は安心しますが、それにつけても案じられるは娘お俊の事、傳兵衛と云ふ客の寧で親方から預かつたが、其時親方の話では、假へ傳兵衛が尋ねて來ても此處に居ることは包み隠せとのことだつたと、話は自づと其處へ落ちて行きます。與次郎は行燈を點してお俊を呼び小聲になつて、

此間の河原の喧嘩で、殺人は傳兵衛との噂であるが、その夜から行方は知れず、相娼の女はお俊と云ふ事を御上でも御存じで、親方へも種々の詮議があるとの事、俺や聞く度にびく／＼すると話をします。お俊は其夜の事の起りも私故と、心許なさ逢ひ度さに胸も塞がるのですが、娘の心分らねば母親は突詰めた男氣で刃物三昧でもせまいかと案じられて夜も寐々眠られぬ、詰らぬ義理立して年寄に憂目を見せしてくるなど云ひます。與次郎もそれにつれて、母者人の氣休に傳兵衛と別れてくと、只管に頼みますが、人の落目を見捨てるのは靡の恥ゆゑ一度逢つて得心させ、譚の立つ様にしやうとお俊は云ひますので、其逢ふのが間違ひの種、一筆退狀書いてくれと母と兄とにせがまれ、お俊は思案を定めて退狀を認めることになりす。かうして今夜こそゆ

つくり寝るであらうと三人とも臥戸に入ります。忍ぶ姿の悄然と傳兵衛は、死なば一所と思ひ込んでお俊の家を尋ねて来ました。慥に此處と門口で相圖の咳拂ひをする、飛立つ思ひでお俊が戸を開ける、その音聞いて與次郎は跳ね起き、暗闇紛れお俊を戸外へ突出し、傳兵衛を無理に引き入れて大聲に喚きながらも胸懐ひ、聲聞きつけて出た母親は、お俊と思つて傳兵衛に探り寄り、これは娘ではないと驚くので與次郎が灯點すと傳兵衛が悄然として居るので退狀を突付けます。傳兵衛は、兼て約束したことを思つて迷ふて來たが、此退狀はと男泣きに泣きま

あります。始めておしゆんの心を知つて母兄は娘を内に入れ、義理を立て抜くお俊の貞節を知つた傳兵衛は共に死んではお二人の歎き、命永らへ亡き跡の間弔を頼むぞと云へば、お俊は夫の難儀を命の際に振捨て、女の道が立つものか、一所に死なせてと隠した刺刀取直すので與次郎は驚いて止めます。母親も、わが子が可愛い子故の闇に恩も義理も辨へず、一圖に二人の仲を引分けやうとした誤を詫び、如何なる國の果までも、山の奥にも身を忍んで、どうぞ連れてくれと涙ながらに頼み入ります。與次郎も、母者人の云ふこと合點がついたら此場を立退く分別がいゝと、健に二人が未長う目出度う女夫になり遂げる、門出の祝に猿を舞はして涙交りの聲で謡ひ、お俊傳兵衛に盃をさせると、編笠深く人目を避けさせて二人を落しやりす。

増補忠臣藏

本藏下屋敷の段

加古川本藏下邸の段

前 豊竹呂太夫

豊澤仙糸

切 竹本大隅太夫

鶴澤清二郎

琴 野澤勝太郎

此作は、作者の名も作の年月も詳かでないが、明治十八年四月、京都南座で大阪彦六座の引越淨瑠璃に上演されて居る所から見て、それより餘り遠くない頃の作と思はれる。お馴染の『假名手本忠臣藏』の中へ此の本藏下屋敷を挿むと、九段目「山科閉居」の前に當る趣向である。故人歌六が折々演じた狂言に「桃井土壇」と云ふのがあるが、其筋も此の本藏下屋敷と殆ど同様で、只、敵役の伊浪伴左衛門が間瀬彦九郎と云ふ名になつて居ると、三千歳姫の出来ないのが違つてゐる位である。斯うなると桃井土壇に三千歳姫の扮飾を施して出來たのが本藏下屋敷でないかとも思はれる。つまり歌舞伎から淨瑠璃に出て、再び歌舞伎に入つた様な形になつてゐる。

桃井若狭助の妹三千歳姫を、許婚の縫之助から遠ざける爲に、此所淺草の加古川本藏の別邸に預けてあつた。

その姫を迎へに來た奸佞の臣、伊浪伴左衛門は、今日恰も本藏を御成敗に殿若狭助が見へるのを幸ひ、毒殺してお家を心の儘にしようと思ふ謀略を、同腹の平馬と示し合せ、襖細目に本藏が窺ふとも知らず、南蠻の毒藥を臺子の釜に仕込んで去つた。

三千歳姫は別れた縫之助の上を思ひやり、こがれ／＼て泣き伏す折、伴左衛門が現はれて、姫への横戀慕から執拗に云ひ寄つた。と、其所へ本藏が姿

人形

三千歳姫 吉田榮三郎

井浪伴左衛門 吉田玉徳

加古川本藏 桐竹門造

桃井若狭助 桐竹龜松

小姓 桐竹小紋

奴 吉田駒三郎

を見せるので、伴左衛門は腹いせに食
つてかかり、又平馬は、本藏に繩打つ
て奥庭へ引け、太刀取は伴左衛門に申
付けるとの御説を傳へる。

聽て老ひの身に繩目もいたくしく
本藏は奥庭の土壇へ引かれた。

若狭助は鎌倉表に於て變應の砌、怨

みあつて高師直を斬つて捨てんと、遺
恨の次第を申し聞かせしに、松の一枝

を切り取つて、まづ此の通り遊ばせと
金打して置きながら、金銀を以て媚諂

ひ、師直を討ちもらさせて我れにあた
ら汚名をかぶせたと、その罪を責めて
死罪を申し渡した。

覺悟を極めた本藏は、最前の臺子の
釜の事を云ひ出すので、伴左衛門は焦
つて斬らんとしたが、若狭助はそれを
止め、自ら成敗すると振りかぶつた太

刀は、水をたまらざる伴左衛門の首を討
ち落した。そして返す刃に本藏の縛を
切り解き、由良助の許に赴いて討たれ
度いと云ふ本藏の胸中を見抜き、又自
分の短慮を止めてくれた禮を述べれば
本藏も臺子の祕密を語つて主君の武運
を喜んだ。

若狭助は虚無僧の編笠、尺八、袈裟
を本藏に與へ、三千歳姫を預けた禮に
は、師直が屋敷の繪圖面を取らせ、大
星方へ土産にせよと云ふので、本藏も
主君の厚き情に涙しつつ、大星が住む
山科へと旅立つのであつた。

猪名川内の段

關取千兩幟

猪名川内の段

女房 おとわ

竹本南部太夫
竹本伊達太夫

猪名川

竹本濱太夫

鐵ヶ嶽

豊竹松太夫

大坂屋

豊竹千駒太夫

呼遣イ

竹本津摩太夫

鶴澤觀西翁

胡弓野澤錦糸

明和四年八月、大阪竹本座が初演である。作者は近松半二、三好松治、竹田文吉、竹田小出雲、八民平七、竹本三郎兵衛で、全曲九段からなり、その中で第二段目猪名川内(今度上演)から相撲の段が特に有名である。出處は當時大阪で、人氣力士として最肩の血を湧き立たせてゐた稻川と、千田川とに絡ませたもので「双蝶々曲輪日記」(寛保二年七月竹本座上場、作者は竹田出雲、三好松治、並本千柳)の、力士達引を纏案して趣向を凝らしたものである。尙原作では、猪名川は岩川とあるが、文政二年九月座廢境内の興行の時から、猪名川と改めて今日に及んだのである。

猪名川の堀江の假住居には、最肩客

からの祝儀贈物が、賑々しく飾つてある。往き來の人はその威勢のいいのを眺めながら、猪名川の全勢をほめたたへてゐた。内ではこれを耳にする女房おとわの顔が歡喜に輝いてゐた。敵方の力士鐵ヶ嶽を伴つて、猪名川が歸つて來たので、おとわはこれを迎へて愛想よく會釋する。折柄、大阪屋から使ひが來て、「錦木身請けの殘金を、今日中に拂つて欲しい。明日になつたらよん所なく他の身請け客に渡さねばなりません」と、歸つて行つた。

猪名川は「これは大變、錦木を他に

人形

女房 おとわ 桐竹紋十郎

猪 名 川 桐竹政龜

鐵 ケ 嶽 吉田玉助

大 阪 屋 吉田兵次

呼 遣 イ 吉田常次

身請けさせては俺の顔が立つものかと、駈け出す。鐵ヶ嶽は聲をかけて「これ猪名川、ちよつと待て、その身請け客は他でもない、俺だ」

猪名川は、扱は彼奴め、九平太の手先となつて錦木を身請けし様とするのかと、

「鐵ヶ嶽よ、一生の頼みだ、俺が受合つた身請けの殘金、二百兩の調達に窮してゐる苦衷察して、九平太が錦木を請け出す事を思ひ止まらせることはな

るまいか」併し胸に一物ある鐵ヶ嶽は、猪名川の言葉尻を捉へ、「汝が惠海庵で九平太を打擲した仕返しだ」と、暴行を加へた。

折柄、取組の番附が届くので、手に取つて見れば猪名川と鐵ヶ嶽の組合せになつてゐる。鐵ヶ嶽は猪名川に、此相撲に負けて呉れるなら、錦木を禮三

郎に渡す様骨を折ると云ふ意を仄めかした。猪名川は無念の涙をのんで、若旦那の爲に鐵ヶ嶽に勝を譲らうと決心して別れた。

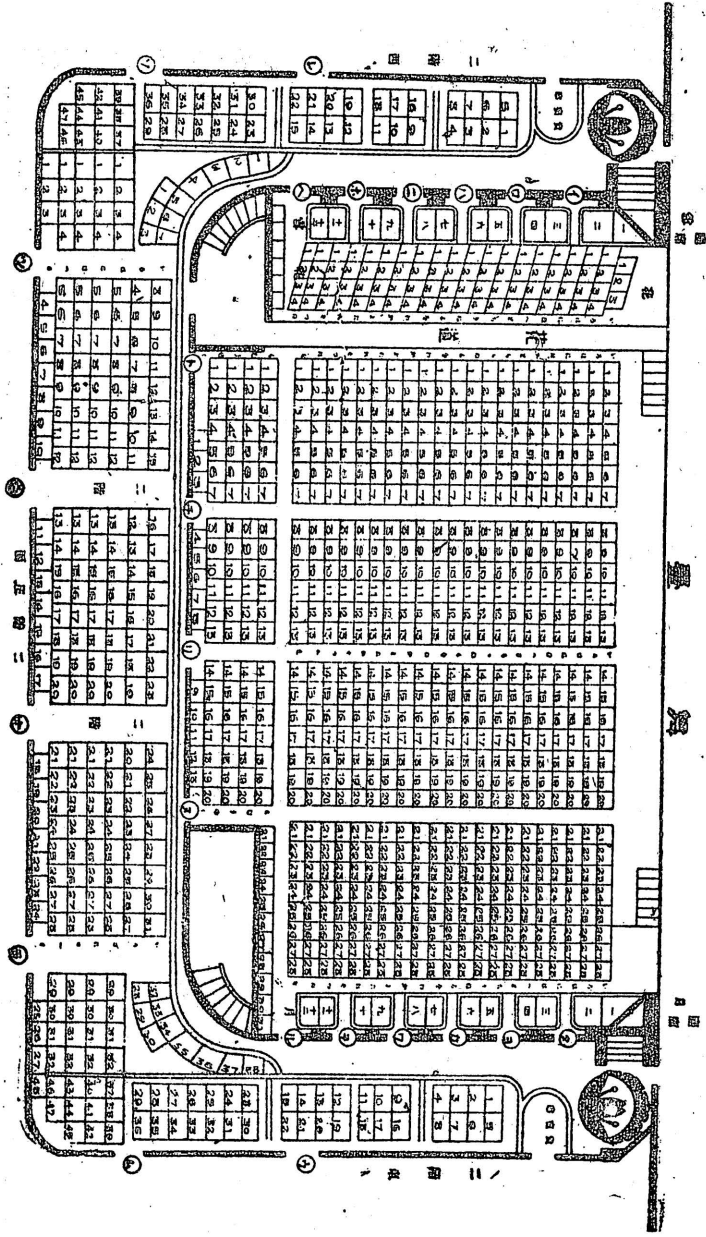
金故に、大事な相撲を振つてやる切なさ、摩利支天にも見放されたかと男泣きに泣く猪名川——が、義理には勝てず覺悟を決めた。

女房はこれを立聞きして、夫の心を察し、せき上る悲しみを態と笑顔に隠し、優しく話しかけて夫の髪を撫でつける。鏡に映る夫の顔は、常になく青ざめてゐた。

猪名川は進まぬ足を相撲場へ——。後に女房おとわは獨り思案にくれたが何か心に決して家を出た。

それは我が身を苦界へ沈め、二百兩を調達せんが爲である。夫の爲に——。

新橋舞廳座席表



二階

一階

四正席二

四正席二

開場毎に篤き御愛顧を賜り謹んで御厚禮申上げます

當劇場は諸事皆様の御期待に反かぬ様懸命に努力致して居りますが、何事によらず皆様直接の貴重なる御言葉頂きたく存じます。

「劇場御使用に就て」劇場を各種の御催し、例へば演劇公演、音楽會、舞踊公演、お渡ひ、温習會、發表會、披露會、祝賀會、慰安會に御利用下さる様御願ひ申上げます。

お願ひ

- 一、お席の番號 を御自宅にもお印し置き下されば御急用御呼出しに御便利で御座います。
- 一、お帽子 は椅子の下へ。御婦人方の庇の廣いお帽子は後ろの人の邪魔になりますから、御遠慮願ひます。
- 一、御貴重品 はお席へお置きにならぬやう。
- 一、御携帶品 は預り所へ。
- 一、御食事は一幕前に御申付な。
- 一、喫煙 及び御食事は観客席では固くお斷り致します。
- 一、御氣分の悪い方は係員に御申出な。

一、お忘れもの 御紛失は直ちに係員へ御願な。

一、寫眞撮影 當場内では特定寫眞班以外は固くお斷り致します。

一、汽車の時間 は萬承り所へ。

一、お電話 は一階右側預り所、公衆電話は一階東西に御座います。

一、御履物 御傘などは必ず一幕前に御受取下さい。

一、係員の不行届 場内設備の缺點は御遠慮なく御申開下さる様。

一、俄雨の際 はお客様のため簡便な方法で雨傘の用意がしてございますから何卒係員に御申出な。

一、舞臺上 大道具照明其他にお氣付の點は何卒御指示を願ひます。

京橋區木挽町 新橋演舞場

支配人 藤井麟太郎

東勇作舞演團公踊

大東亞交響樂團演奏
指揮・小船幸次郎

(名作三大バレエの夕)

- 一、レ・シルフィド……………ジヨパン曲
- 二、牧神の午後……………ドビュツシイ曲
- 三、第七交響樂……………ベートーヴエン曲

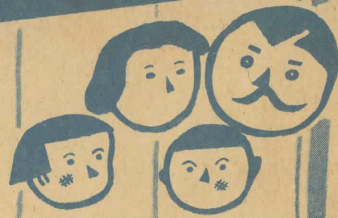
ベートーヴエンの交響曲、本邦最初のバレエ化

七月廿六・廿七・廿八・三日間、毎夕六時半

廿八日に限り晝一時、夜六時半、二回開演

歌
舞
伎
座

スピロド油肝^{ミツワ}



一家総はりきり

無病息災

戦場は吾々の身近かに續いております。最後の勝利を

確保する迄、一億同胞みな健康であらねばなりません。増産に挺身する人も勉學する人も、家庭を護る人も、こぞつて張り切つた生活をいたしませう。

不足しがちな栄養を総合的に攝取する必要があります。本劑は各種の栄養素を多角的に含有し且つ完全乳化してありますから胃腸障害を起す心配もなく吸収いたします。

毎日一顆——二顆

ミツワ石鹼本舗藥品部

許特賣專

ラオゼ

磨齒用薬



生活の
科學化は
手近から

親しまれて
いる歯磨の科學化こそ手近で且
も必要な事です。徒らに遠大な物を希まづ
私共の生活に科學性を取入れる事は、最
とも、まづ最も身近にあるものから心がけ
るべきで、例へば、朝に夕に私共の生活に
つ有効的です。

主劑ゼオライトの持
つ吸着・置換・收斂
の三大科學作用は豫
防齒科醫學多年研究
の所産であり、齲齒
齒槽膿漏の完全豫防
と同時に、咀嚼力を
強化いたします。

こんなお方は
せひせオラを

- 1 齒を強く美しくと望む方
- 2 林檎を噛むと血の出る方
- 3 齒刷牙を使ふと血の出る方
- 4 むし齒が多くて御困りの方
- 5 咀嚼力が不充分で困る方
- 6 在來品に御不満の方

錢八廿 共稅

⊙ 定價部金貳拾錢

部品藥舖本廠石ワツミ